

これら一連の調査研究を土台として、九州における山地畜産の粗飼料生産の安定に寄与したい。

(黒木)

以上簡単に研究室の概要を紹介したが、九州御来駕の折は当支場にもお立寄りいただければ幸いである。

## 11. 沖縄県の森林の現状と天然生常緑広葉樹林の施業方向について

琉大農 平 田 永 二

沖縄県の林野面積は約 13.2 万haで、森林施業の対象となる林地面積は約 10.2 万haである。これを所有形態別に見ると、国有林 26%，民有林 74%で、全国の割合とほぼ近似している。民有林の所有別内訳は、市町村有林 60%，私有林 34%，県有林 6%で公有林野の占める割合の高いのが特徴となっている。また、立木地は約 8.8 万haであるが、その約 88%は天然林で、人工林はわずかに 12%と造林の遅れが目立っている。人工林のおよそ 70%はリュウキュウマツで、その他の造林樹種としてはモクマオウ(14%)、スギ(7%)、ハンノキ(4%)、テリハボク、エゴノキ、イヌマキ等がある。天然林の大部分はイタジイを主体とした常緑広葉樹林である。一方、林地の蓄積量は国有林 303.4 万m<sup>3</sup>、民有林 295.0 万で、合計 598.4 万m<sup>3</sup>である。ha当り蓄積は国有林 113 m<sup>3</sup>、民有林 39 m<sup>3</sup>、平均 59 m<sup>3</sup>で、特に民有林は内容的に著しく低い現状にある。林地に占める天然生常緑広葉樹林の蓄積割合は約 81%である。

このように沖縄の森林資源の大半を占める天然生常緑広葉樹林は、イタジイの外ヒメユズリハ、コバンモチ、イジュ、イスノキ、オキナワウラジロガシ、タブ等 30～50 種の樹種で構成され、一般に樹高が低く、立木本数の多いことと相俟って大径木が極めて少ない。そのため、生産性の低い粗悪林分が目立って多く、木材生産の立場からは、けっして良好な状態とはいえない。しかし、これは戦中戦後の混乱期に軍用材、薪炭材及び復興資材として大部分の森林が皆伐またはぬき伐りされ、林相が極度に悪化し、何の保育も加えられず放置されてきたためで、林分構造の改善を図り、林相を回復させ、生産性を高めることに努めるならば、経済的な経営も可能であると思われる。

一方、沖縄は自然環境の保持、国土保全、水資源の確保等、森林に課された公益的役割を重視しなければならない地域が多い。

そのため、沖縄においては森林の公益的特性を十分に認識し、公益的機能と木材生産機能の調和のとれた施業技術の体系化に努めるべきであり、これが沖縄林業の重要な課題でもあろう。しかし、本県の森林土壌は地勢の影響を受け乾性型が多く、乾性、弱乾性の土壌及び岩石地で約 6 割を占め、造林に適しない所が多いといわれる。土壌の維持、増進を図るためにも大面積の皆伐は極力さげなければならない。

このような観点から、沖縄の天然生常緑広葉樹林の施業を考えた場合、構造材生産を主目的とした択伐方式が有利であるといえよう。しかし、現存する常緑広葉樹林の林分構造からすると、いきなり択伐を実行することの出来る林分は極めて少なく、殆どの林分は萌芽更新後放置され、しかも優良木がぬき伐りされたため、形質不良木が大半を占め、生産性の低い活力のないものとなっている。そのため、まず林地、林木の生産力の増進を主目的として保育を行い、林分構造を整え、目的樹種の形質、生長の促進を図って択伐林へ誘導して行くのが適切であると思われる。

ところで、公益性を基調として木材生産を効率的かつ保続的に行うための択伐林の施業技術を確立するためには、いろいろな林相、場所を異にして数多くの試験地を設置し、継続的な調査研究が必要であることはいうまでもない。しかし、現在のところ択伐林に関する試験研究は皆無であると言っても過言ではない。演習林においては、現在、最も沖縄に適した択伐方式による施業方法の確立を目指して試験地の設定を計画しており、その成果が施業と結びつくのにはかなりの時間を要するものと思われる。

最後に沖縄県は、わが国唯一の熱帯、亜熱帯地域に位置し、本土とはかわった植生、林相を呈している。特に西表島は台湾中部と同緯度に位置し、マングローブ林がよく発達して熱帯、亜熱帯独特の景観を呈している。すなわち、西表島は熱帯農学の研究を進める上で極めて貴重な存在であるといえよう。幸いに琉球大学農学部は、西表島国有林に679haの貸付を受け、熱帯、亜熱帯の農業に関する基礎的研究及び教育を行う目的で、昭和46年11月に附属熱帯農学研究施設を設置することができた。現在、熱帯有用植物の導入、順化の研究を主題として東南アジアや中南米から果樹、花木、作物と共に樹木の種子も取りよせ、その導入試験を行っているが、今後は郷土樹種の植栽試験や現存する天然生常緑広葉樹林の施業に関する試験等各種の試験研究も併行して実施すべきである。そのためには、まず施設の充実を図り、琉大だけで閉鎖的に使用するのではなく、広く全国の大学並びに研究機関等の協力を得て、大いに活用すべきであると考え。施設設備が整備充実し、関係機関の協力を得ることができれば、本施設はわが国唯一の熱帯、亜熱帯の農林業に関する基礎的研究の場として発展するものと信じる。

## 12. 九州短報

北海道立林業試験場 阿部信行

私は現在3ヵ月(昭和53年10月～12月末)の予定で九大西沢研究室へ研修にきています。九州は昭和45年に九重山の調査および昭和50年の林学会で過去2度きたことがありましたが、短期間とはいえ、やはり実際に住んでみると通り過ぎたのとは色々な意味で違います。北海道育ちの私にとっては、見るものすべてが珍しく、この研修は貴重な体験です。研修で感じたことを、若干、記してみ